平新報

發行日毎月三回 五ノ日發行
編輯兼發行印刷人 山野邊庄吉
發行所 福島縣平町南町七七 平新報社
廣告料五號十二字一行一回五十錢 場所指定倍增
送料共定價一部金十錢

忘れられむとした御尊蹟
紀念すべき高月館跡

北白川宮能久親王殿下が戊辰の役の際、陸奥に御轜軻遊ばされ、本郡泉 平に各御一泊し給うた曠古の御尊蹟に對し、何等の紀念し奉る可きものなく等閑に附してあるを遺憾とした、平町草野順平 加藤丈夫 諸根樟一氏等は種々研究を遂げ、去る三月三日、平町長及び泉村長宛に、參考書を添へて顯彰方の請願書を差し出したるに、平町に於ては始めて之を知り、愼重な調査を爲したる上何等かの形式に出づべく町會議員中より委員を選びて近く御一泊せられ給ひし、高月館跡（現飯野氏邸）を視察すべき由從つて飯野家にては有志と諮り之を期とし、本年を以て、殿下の御一泊より丁度六十年目の即ち還暦に相當するので來る七月二十四日（實は明治元年舊五月二十九日御宿泊なるも一ケ月延期）當時を回顧し之が紀念小祭を御尊蹟内に擧行すべく決定した。猶當日は舊磐城三藩主、外飯野氏の縁族たる現貴族院議員子爵白川資長閣下を始めとして本郡の知名の士の臨席を乞ふて式をなすと。

通信

二年五月三十日
『於ローマ』　金古久次
植竹源太郎様

三月の末迄伯林に滯在、四月塽旬及「チエッコ」方面に旅行、五月初めより和蘭、白耳義を經て佛國に入り暫らく滯在佛國に於ける御用を終りて一昨二十八日「ニース」より「ゼノア」を經て昨二十九日ローマに著いた二三日滯在の上「ナポリ」「ポンペイ」に參り引返して「フロレンツ」「ベニス」「ミラン」を見て「スヰッエル」に參る豫定に有之候乍末遙かに御健康を祝し申候

× ×

六月十二日
青根溫泉にて　鈴木箭山
山野邊眞立様

黄塵を逃れ坂本氏と共に青根に來たり、風光と泉淸を見るに馬鹿に出來ぬ、否東北に冠たりとも云ふべきならん青嶺海に連り山姿最もよろしく東海の地にてあらば其盛思ふべし、今に野趣の多き處藥鍼の遠く及ばざる故ならん哉

× ×

六月二十日
千葉縣四街道野重四ノ二　新妻熊男
山野邊庄吉様

野趣と平和の鄕里に歸りわづか一日のあはたゞしい裡にも何となくのんびりした氣分を味はつて來ました。平新報の益々御發展を承はり實にわが事の如く嬉しく存じました。御努力の程が日一日と報ひられて彌々立派な新聞の現出を御期待申します。殘餘三ケ月の營内生活です、この一ケ月は牛れて初めての多忙な日を過しまして軍人的意識を熾烈に感じさせられました。御自愛を祈る

× ×

六月二十一日午前
植竹源太郎
山野邊眞立様

「前略」新報上の「活耳目」は有力の文字にて敬服至極贊成。桐谷氏の叟石君哀悼以つて亦大贊成。磐中創立は紀元「二千」五百五十五年創立翌年五月五日「開校式」擧行は故ある事なり」記憶に便なるべし。「後畧」

新川柳

雜吟

もう夏だ〳〵金魚賣りの聲　棚倉　佐川有頂天
拜啓と書いても一度考へる
觀劇の藝をほめ〳〵目を拭へ　平町　池上富水
シャルムーズ錦紗互にふり返り
洋裝のうらみは足の太り過ぎ　平　佐川滿壽莊
大空へ男を誇る鯉幟り
プロペラの音に仕事場空になり
發熱の頭に親の手はふるひ　佐々木あきら
節穴の日射しい白く立つ埃
春の雨朝寢の耳を輕く打つ　磐崎　久田狂水
くすぐつたい樣に新聞書き立てる
白牡丹今朝はつめたい雨に濡れ　川前　永山餘花郎
ボッネンと夜が明けて行く非常線
旅鞄一夜遊んだ妓の寫眞
人妻になつて愛想のよい女　平　綿引東天紅
白粉は社長が買つてやる噂
發展のビラ新築も刷入れる
物足らぬ顏で禁酒の箸をとり
歸省の日泌々井戸の水の味　小　新島　新坊

青葉
久田狂水選

朝露を明るく乙女桑を摘み　有頂天
評　晴衣作れと母に言はれて
ホト、ギス青葉の村へ聲をかけ　東天紅
評　月の彼方へ影は消えたり
閑古鳥鳴いて青葉の村は暮れ　一角
評　煙り長閑けく空は棚曳く
退院日窓の青葉へ未練がり　新坊
評　床に眺めし時を思ひて
城跡の青葉昔のまゝの色　新坊
評　お濠の水に影を寫して
腰だけが青葉になつたビルデング　餘花郎
評　屋根は星降る空に聳えて
スポーツの隙を寢轉ぶ青葉陰　滿壽莊
評　顏を撫でゆく風も涼しく
雨より青葉の艶に夏を見せ　狂水

隣り
吉成劍突坊選

俄雨隣りの着物まで運び
獨り者隣り近所の子と遊び
お隣りの琴へ尺八音を合せ　東天紅
筍の隣りへ生へた界論
流行醫の隣りは矢鱈起される　滿壽莊
灯が燈り隣り座敷の賑やかさ
お隣りも同じ構への會社員　狂水
三階の立派な家の隣りです　獅子郎
隣り村隣りの村と意を合せ　一角
隣國の支那を先生例に引き　餘花郎
新家庭隣りを顧問役にする　東天紅
錢湯の隣りの床屋手が省け
新婚の旅隣室も明けさせる
文化村隣りは碧い眼の婦人　新坊
親類の誇り隣りから貰ひ　一角
朝顔が伸びて隣りの木戸を閉め　獅子郎
評『朝顔に釣瓶さられて貰水』加賀の千代女も此の句を見て何さする？　嗚呼また昭和の代にも斯かる名句の續出するをや
お隣りの女中に聞いた詰なり　餘花郎
○此の女中何を言ふたのか川柳の妙味說明せざるところにあり
隣國の內輪喧嘩へ兵を出し　あきら
○評『内閣がどうなろふとも伸びて寢る』のん氣なことも言ふて居れぬ時局の展開は何處まで續くことか　義のため東洋の平和のため——明治二十七八年役の三國干渉忘れざるか咄

追句
吉成劍突坊

お隣りは先妻の子と後妻の子
何もかも隣り同士の睦まじさ

新川柳募集

題　洗髮　五句吐　大谷五花村先生選
同　魚籠　五句吐　渡邊一角選
川柳雜吟　十句　社中選
締切七月十日
句稿屆所　平町一丁目二〇　綿引東天紅宛

懷かしき
舊師の溫情
植竹源太郎

○第一章　博士と日本

「親日」を以て著名なる「グリフイス」博士は予の幼少の時の恩師なり博士名は「ウイリヤムエリオット」「グリフイス」は其の姓なり。天保十四年九月十七日米國費府に生る、幼少の時より日本事物に感興あり嘉永三年四月十七日、費府を流るゝ「デラウエア」河に、汽船「サスクエハナ」號の進水式ありしが、父君に隨ひて見物したりしは其の八歳の時なり。此の汽船は後日水師提督「ペリー」の旗艦となる、是れ博士の日本に關して興味を懷き始めたる端緒なりと云ふ。万延元年には費府に在りて、幕府の始めて派遣したる使節新見豊前守の一行を目擊したりと云ふ。慶應二年乃至明治三年の間に、日本留學生の二人を敎授し、橫井小楠の二甥、いせ（伊勢？）ぬまがは（沼河？）其他「ニユー、ジアシー」洲の「ニユー、ブランスウイク」市に（紐育に近し）群集せる日本青年の幾十人を敎授したるは此の博士なり。

○第二章

福井藩の招聘

福井藩主松平慶永侯（號は春岳）は夙く既に橫井小楠の意見を嘉納し、他に先んじて藩政の革新を企畫したるが、米國に則りて學校を組織し、自然科學を敎授せしめむと欲し「ルツジヤース」大學を介して「グリフイス」博士を招く、明治三年十一月博士聘に應じて桑港に到る。是より先、米國內東西諸州相互の往來は專ら海路巴奈馬の地峽を通過したるが、此頃始めて大陸橫斷の鐵道開通し博士は其の便を得て、桑港に著したるなり。十二月一日桑港出帆、我が橫濱に到著したるは同月廿九日なり。博士は實に、「知識を世界に求め、大いに皇基を振起す可し」との明治天皇の御誓文に遵ひて、海外より招かれたる御雇敎師の嚆矢なり。明くれば明治四年東京滯在七週間、其間自ら進みて大學の敎授に任じ、旁ら重なる大名並に副島伯大隈伯等の多數の顯貴に接す、二月廿一日汽船にて神阪へ向ふ。廿七日七騎の士あり。福井より來り迎ふるに會ふ。一行十二人轡を並べて無事福井に達したるは三月四日なり、翌日、藩主の接待あり、七日、城內に於て科學の敎授に着手し、日本最初の化學實驗室を設く。予は當時年齒僅かに十四、生徒の席末に列して「グリフイス」博士に親炙したり、想ひ起せば、當時維新の大業纔かに成りて宿弊打破の聲大いに起りしも、封建の習俗善惡兩つながら依然として存在せり。藩學は城中本丸の御殿其儘を用ゐ、嚴として舊時の偉觀を失はず敎室を連ね用ゐたる廣潤なる控所には、腰間短刀を帶び、烟器を挾みたる粗野なる學生充滿して紫雲室を蔽ひ、喧々囂々討論を事とし、博士に遇へば、戲れに槻刀を手にし、鯉口を開きて、其の膽を寒からしめし者あり博士も衣中に拳銃を匿し、不虞に備へたる時勢なりき。敎室は黑緣の大襖にて之を隔て、數十疊緣付疊を、敷き詰めたる廣間にて、椅卓を用ゐず黑板も無く、白墨も無し英語敎師の一人太田某先生は常に生徒の坐間を往來し、箸大の銀製字突きを以て敎科書中の文字を指點しつゝ敎鞭せり。敎科書の一は當時新輸入の懷中形布裝繪入りの米國兒童用讀書入門（價廿五錢と記憶す）にて、其の異臭は即ち洋臭なり。今猶ほ予の鼻腔に存在せり開卷第一章の文に曰く、猫が鼠を持つ、と之を彼の四書五經の如き敎科書に比すれば一種の玩具に過ぎざれども、予は喜びて愛讀せり。序に附記す其後明治六年に至りては此の藩學は略ぼ中學の組織と爲り、外人敎師は溫厚篤實なる「ワイコツフ」先生にして、同年福井に於て複版したる米國出版の會話書を用ひて敎授せり、其の用紙は福井產の鳥の子紙を用ゐたり、予は今尙ほ其の一本を所持せり。此の先生は其後多年日本に留りて東京明治學院に在りしが、予は往年訪問して懷舊談を試み書信をも交換し、寫眞をも保存せり、「ワイコツフ」先生久しからずして去り、快活なる「マゼット」先生之に代りて、福井城後の外人敎師と爲る。さて「グリフイス」先生は實驗臺を前にし、通譯大岩貫一氏を伴ひ、化學實驗に餘念なかりしが或時室內薄暗き一隅に立ちて、物凄き光輝ある兩手を緩やかに前方へ垂れ憂愁を帶びたる音聲にてあけい（幽靈）と云ひて我等を驚かしたり、予は此れに因りて燐の何物なるかを知り、感興頗る深く、幽靈の語は其後常に予をして先生を想起せしむ。嘗て福井の本願寺に小規模なる博覽會あり蓋し日本最初の博覽會なりしならむ、其當時空中高く一小輕氣球を飛揚せしめて觀衆を驚かしたるは此の博士なりき。博士の住宅は一万石の家老酒井外記の邸なりしが、每宵多少の群集を邸前に見る。硝子と稱する透明なる一種の板を透して四邊目映ゆく發射する石油の燈光を奇とするなり、行燈の薄暗き光に慣れたる人々の之を奇とする亦宜なる哉。先生の行く所、一群の人衆每に必ず之に尾行す、其の停まる所必ず之を環視す。

博士授業を開始してより僅に數月、七月十八日に至れば一大詔勅の降下ありて、人民の階級は華士族平民の三と爲り、士族の帶刀は廢止せられ、世祿は金祿と爲り、國家の權力は東京に集中せられ、各藩を廢して府縣を置かる。十月一日城中大廣間に廢藩の式は擧られ藩主親臨して別を二千の藩士に告ぐ、博士城中に在りて親しく之を目擊したりと云ふ　此の月全國二百の城中執れも同樣の典を擧げ、封建の日本は茲に始めて統一したる國家と爲りたり　十月二日藩主舊領福井の地を去りて東京へ移る。

○第三章

博士の上京

明治五年一月十日、是より先、博士は工業學校新設の意見を太政官へ提出したりしが、新置の文部省より、其の長官大木喬任の名を以て、東京へ招かる。一月廿二日博士福井を出で靜岡を通過して上京す。途中日本最初の電信機を見たり。京濱鐵道は完成せり二月着京其後は明治七年迄大學に於て理化學を敎授し、自ら進みて、心理學をも敎授したり。此の間「マーガレットクラーク、グリフイス」孃は日本最初の官立女學校の校長たり。學校へは嘗て皇后陛下の行啓もあり、華族女學校及東京女子師範學校の前身なり。要するに博士は日本在留四年間敎育事業に從事したる傍ら休暇には內地の探檢に從事し屢々天皇陛下に拜謁の榮を賜はりたる後、日本の地を去りて米國に向ふ　實に明治七年七月十八日なり。

——［未完］——

「寫眞は磐中校長現職時代の植竹源太郎先生」

磐中同窓活躍號
刊行を贊援す〔四〕

平白銀町 米穀商
十八回 志賀忠彌
福島縣農工銀行平支店
十八回 伏見文彥
磐城實業銀行勸務
根本武雄
平町五色町
二十回 長谷川德代
慈惠醫大學在學中
廿七回 谷口孝雄
十六回 佐々木繁吾
平町土橋齒科醫院
十七回 原精一
湯本町荒物商
十八回 比佐男
東京地方裁判所檢事
十九回 籠倉正治
湯本町役場書記
十四回 鈴木信顒

湯本町荒物商
十七回 富樫勝秀
藤本ビルブローカー銀行第二部東京支店
十五回 佐藤一郎
平町五丁目
十七回 平松茂
常磐工業會社植田町
十四回 專務 小野庄一
千葉醫科大學在學中
二十回 高柳博明
衆議院議員「湯本町」
二回 比佐昌平

平和削節
製造販賣
鈴木道太郎商店
湯本驛前
◉最上鷄餌魚肉粉

涼しい夏の洋服!!!

ラーミー	上下組	三円五〇ヨリ
ポプリン	仝	三、五〇ヨリ
黑セル	上衣	七、五〇ヨリ
アルパカ	仝	四、八〇ヨリ
上等パンビスズボン		三、五〇ヨリ
白セル	仝	四、五〇ヨリ

各種豐富荷揃
平町二丁目
なかや洋服店
電話二〇三番

亀 中形浴衣地陳列會
（六月十日ヨリ開催中）
涼……
美……
粋……

特價品
侶中形……武圓武十錢——手拭地……八十錢
白染絣……九十五錢——絽縮緬衿……廿八錢
レーヨン衿……十六錢——

回 經快な小供服
友仙モス製……武圓二十錢ヨリ
富士絹製……武圓七十五錢ヨリ
回 本麻蚊帳大提供仕居候

亀 中野吳服店
平町三丁目　電話六七番

二番三番の田の草になくてならぬ保護器
圖 農家の福音
開闢以來の一大發明
田の草取顏面保護器
（新案特許出願番號九八八六）
人生として眼程大切な物は有りません今度發賣の田の草取り顏面保護器の特長と効力を御試し下さい、何處の國でも田の草取りの時稻の葉先で大切な眼を痛め又は顏面に傷をつけ多大の金錢をつひやし其上片眼や兩眼を失ふ人が澤山有ります。其豫防の爲に苦心の結果此程完成致したのが本器であります。本器は全部金屬製で有ります。最も堅牢無比にして安價ですから是非御試し下さい。
〔定價金五拾錢〕
製造元
常磐線勿來驛前
小林章二商會

良品廉賣
確實敏捷に勝る商略なし
久の生命なり

營業課目
鑛山用諸機械　銅鐵材板硝子　鍋釜類食器具
輕銀琺瑯製品　特選スコップ　シヨベル　釘針金
亞鉛枚　金庫度量衡器　農工具打物　磐城セメント
ボールトナット　バルブ　消火揚水喞筒
土木建築金具　坂本式ベルト　國產工具用鋼
スパイキコック類

平町五丁目
特約發賣店
久 釜屋商店
振替貯金口座東京一〇九五六番
電話長九番 一三九番
◎品質優良價格最低在庫豐富ニ出荷ノ迅速ト現金取引ハ弊店ノ五大特色ナリ

日本石油株式會社特約店
平町二丁目
營業課目
內外機械油　發動機用油　色油類各種　度量衡器　カーバイト　コールタール　石油乳劑
清 關內油店
關內正一
電話長十六番
油槽所 福島縣平町田町 電話六四〇番
支店 茨城縣多賀郡關本驛前 電話平潟三十七番

動脈硬化症、腦溢血特効劑
青麻山
中風靈藥
定價　二週分一、七〇　三週分二、五〇　五週分四、〇〇
本劑は、家傳靈藥にして頗る賣行盛んなり。難病と稱せらる中風症の根治せる實例幾多を以て、其眞價の偉大なるを立證せり。試みに二週分の服用を勸む
代理店 山野邊藥局
平町五丁目角

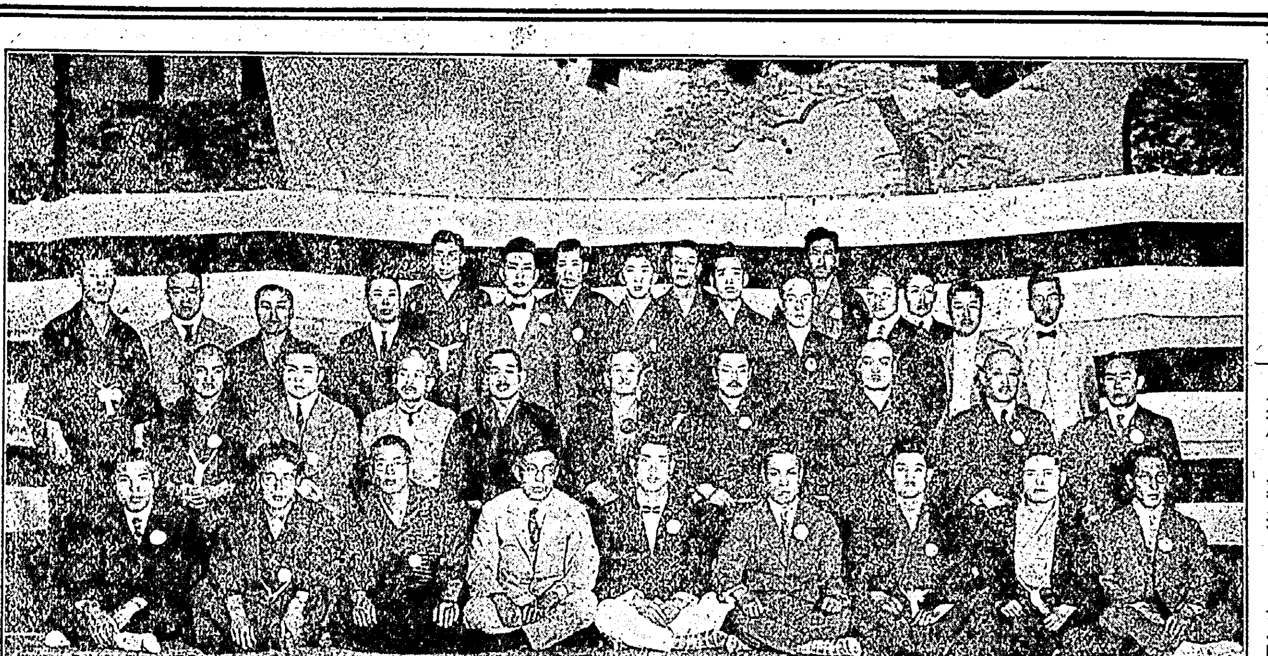
內科、小兒科、皮尿科
藤名醫院
平町紺屋町
電話五〇七番
入院應需

平町南町
電話一二九番

高久病院
平田町　電五一三番

意義ある人心啓發運動
壯嚴裡に催された
磐城講道館有段者會 發會式

「平報」磐城講道館有段者會發會式は去る十二日平劇場に於て盛大に催された。先つ午前十一時豫定の通り會長諸橋守次氏の元氣横溢せる開會の辭についで幹事が加藤丈夫氏左の綱領宣言書朗讀



綱領宣言

一、吾人ハ心身ヲ錬磨シ進ンデ國運發展ノ大任ヲ負擔セザル可ラズ

一、吾人ハ質實剛健ニシテ犧牲的精神ヲ涵養セザル可ラズ

一、吾人ハ柔道ノ眞髓タル精力最善活用、自他共榮ノ大精神ヲ持シ其ノ社會的生活ヲ規セザル可ラズ

其間元磐中教諭たりし八中學校教頭平賀仙三郎氏其他より祝電あり

來賓の祝辭として縣議平消防組頭井上茂作氏、平警察署長權村慶氏、磐中校長席上齊治氏　平町長伏見彦衛氏　祝詞代讀　白井磐中同窓會長「仲里副會長代讀」三森平青年團長　次いで嘉納師範の訓話にて閉會中食終つて一般觀衆を迎へて講演會と龍攘虎搏の實演あり。當日は野崎才助氏や其他の葬送あり又三縣下庭球大會ありしにも拘はらず觀衆は場に溢れた盛況であつた。

◎講演

諸橋會長の開會の辭についで、柔道の起原に就いてと題して岡田朝九郎氏の懇切なる説明あり、鷹崎正見氏の熱辯について「柔道の私見」の下に村上邦夫氏終りに別掲の如き嘉納師範の講演に移つた。

◎實演

一、投の型（橋本四段 岡田三段）
一、極の型（櫻庭六段 橋本四段）
一、柔の型（高橋六段 村上六段）
一、古式の型（村上六段 永岡八段）

◎亂捕〔一〕

齊藤四段「相馬」
一級　荒川來四郎
一級　志賀　重慶
一級　蛭田　四郎
二級　根本　融
二級　大川　傳
二級　鯨岡　俊

櫻庭六段〔二〕
初段　樋口
二段　舟生
三段　長谷川
三段　草野
三段　松永
四段　片寄

次は五人かかり
鷹崎五段
初段　賀澤
初段　樋口
二段　齋藤
三段　草野
三段　松永

右終るや……

橋本副會長の閉會の辭に依つて當日の意義ある發會式は閉ぢられ上掲の如き記念撮影をなし夜に入つて住吉屋本店に於て嘉納師範一行の小官民公同の歡迎會を催し是れ又出席員百名近く盛會であつた。

發會式雜觀

△本發會式は多大の經費を費せしに拘らず全部會幹部の負擔にて他より寄附をうけなかかつた事である。

當日には水道問題とか何とかあつて此處許りは、呉越同舟席を同うして參觀し歡迎會にも列席した。

△此の會は將來磐城地方人心、炭礦、農村方面の元氣作興に何等か貢獻する事であらふし會長諸橋守次氏は嚴父久太郎翁の事業としてこの會を踏み臺として、平に武德殿建設の志あれば數年足らずして民衆的な武德殿は大運動場開設に先だちて新川端附近に壯嚴なる一建築物は聳え立ち磐城風教の啓發の的の集りとなる事も遠くはなき事であらふと思ふ。

即吟

柔道發會式場にて
「耕影」　酒井國三郎
◎皐月晴れ龍攘虎搏肉躍る

精力最善活用
自他共榮の大精神
嘉納師範講演速記

今日私は話をする積りでなく突然願はれたので何か益になる話をしてみようと考へたのであります。

實は今朝發會式に於て極く短時間に精力最善活用自他協力共榮に就て話しましたが、時間が足りなすぎて充分云ひ得なかつたのであります。されば云ふて同じ話をするのも氣がひけるから今朝話をしなかつた部分に就て、今日は御老人も御小兒さんも大勢の樣ですからその何れにも興味のある話を致しませう。

元來私が精力の自他善用を説いてゐるのは私達の道に就て至大の關係を有してゐるからであります、右來それに關して幾多の戒が傳つてゐます、近來は歐米諸國からもそれを意味した諺とか主義とか思潮とか云ふものも幾多輸入され、餘り多過ぎるので何れを取つて善いのか、惡いのか迷はされてしまひます。之が今日多人數の人が分つてゐない一人が之を善しとすれば他は此方の方がよいと云ひそれ〴〵自分で勝手に善惡をつけ、自分のだから善い俺の云ふ事だから善い等と云つてしまひます。之に就て判り易い事ですから一例を云ひますが、先般有島武郎波多野秋子の兩氏が不都合な事を致しました。それで大部世の中に問題とされて居ましたしかし不義をしたと思つたのか兩人で輕井澤の高地でくびれて死んでしまひました。所が彼等の周圍の友人等は此事に就て斯う云つて辯明してゐます。即ち彼等は戀愛至上主義でありましたそしてその思潮に忠實であつたに過ぎないそれであるから何等罪惡的の罪惡では無かつた。

そうすると何事であつても昔からの孔子や釋迦の教へに脊いても自分の主義だと云へばよくなるものでありますか。所が此事件に對し識者の意見は紛議し、雜沓し、徹底した斷案を下したものがありません。それであるから私達が地方へ講演に行つても之をよく尋ねられました。地方の人は余り考へがないからどうしても分らない、道德と云ふものは飛んでゐるかの樣に考へてゐます、それ故に『道德は天地の間に在るんだ』『いや俺の頭の中に在るんだ』『いや貴樣ではない俺の心の中にあるんだ』等云ひ合つて一向要領がないんです。釋迦が説いた孔子が説いたと云つて各々が自分の頭の中にある道德を云つてゐます。それであるから道德は在來人の頭の中にあるものだと云ふ事になつてしまひます。ところが決してさうではない即ち道德とは

社會存續發展

の原理であると云ば誰も之に容喙するものはあるまい社會を一層よくしお互の存續發展に資するものは善であります。

社會に居つて他人と一緒に生活してゐたいと云ふ以上は此社會に夫々自分の正しい道を守つて發展すればよい、それは社會發展の原理であり云ひ換へれば精力最善活用と云ふものなのであります。

戀愛至上主義は此に於て社會存續發展の原理を無視してゐます、何よりも戀愛が至上だと、彼等は云ふてゐます、そして幾多の事で之を説明するかも知れません、さうすれば或人は一寸之に反するに困るかも知れません、併し斯樣な議論を以てすれば彼等は何とも云へまい、即ち戀愛を至上とするなら此に全じく切試し自分は一回人を切つて見たくて仕方がない、そんな折たま〳〵人から古今の名刀正宗を貰つた之でどうしても人を切試しして見たいが社會存續發展上切る事は當を得まい。それにつけて戀愛至上主義の理論も成立すまい輕井澤の首くゝりはいゝが切試し至上主義は恐入つた　即ち今日限りその戀愛至上主義を廢すか又は止めてしまふと云ふに異ひない。

社會存續發展の原理も常に之を運用し活用せねばならない。誤つて之を利用してはならない、即ち俺は毒藥を試す主義だから常に毒を盛り毒を用ゐる。斯樣な事をすれば社會生活存續發展の原理に照せば之に背くからよくない。されば道德とは何も昔の人の云つた事ばかりではない。人に物を讓ると云ふ事は道德の根本原理である。道德とはヤソ孔子の教へである。それで自分は勝手氣儘せず人に讓らう、之が社會存續發展の原理である。所が何時でも人に讓ると云ふのは社會存續發展の原理であるか、今此處に川があるとする、向ふの部落は皆金持の人許り住んでゐる、此方には銀行もある、商店もある、所が一兩日向ふの部落に大事な病人が出來た、此方の部落から醫者が招かれて行かうとする。たま〳〵盜賊が向ふの部落へ行つて人を殺し金を掠めようとして醫者と同じく川口へ來た、舟が一人しか乘れない所だつた。その時醫者が若しあゝ盜賊さん盜賊さん貴君に道を讓りませうと云つて盜賊に讓つたとしたら、是こそ大間違だ。道を讓らないで行くべきではないか——。

道德は讓る事

を主張する時にかうした矛盾が綻びて來る此特殊の場合をどう解決するか所が社會生活存續發展の原理から云ふと普通は社會の爲に讓り合ふのは眞に美はしい道ではあるが、特殊の場合には明確に適ふ場合には人を押しのけて行つてもよいと云ふ事になります。

嘘をつくと云ふ事は人に爲すまじき行爲である若し嘘をつけばその人の信用がなくなる、それでは、いつでも嘘をついてはならないか。今重病人がゐる二人の子供があつて之を看護してゐる。たま〳〵醫者がもう危篤だ死ぬだらうと宣言して明後日死んだ、その前に更に一人の子供の兒が北海道に行つてゐる便りが一つも來ない、それで親は心痛して未だ便りがないかないかと云ふてゐる、此時便りが來たよ御安心なさい、これ〴〵だといつはれば少しでも親の心がはれるだらう此の嘘果して善惡かと徴すれば東西の道德家は皆言を同じくして承認するだらうさあそこで嘘をつけば人間の信用がゆるむと禁じてゐるが此特別の場合には誰にも責められずにならる何となれば社會生活存續發展の原理に反してゐないからである。之に依り幾多の問題も解けてしまふのである、此原理は誰も疑ふべからざる問題である。

今日ある一宗教と他の宗教との間に種々な紛擾が醸されてゐるが、此原理が裁判するとすれば易々解決出來るものであります、即ち此方の宗教も餘り出張らず向ふでも讓りかうしてお互が此原理に基いて行へばいゝのであります。

然らば此原理はと云ふと社會存續の爲に人が互に讓り合はねばならない、私が今一杯の水を飲みたくて仕方がないと云ふ時他人も飲みたいと云ふ時お互に喧嘩したら安心して生存する事は出來ない、その時お互に讓り合つて私も半分で他人も半分で我慢するなら何等の憎しみも湧くまい大勢の者が社會を構成してゐる時お互に讓り扶け自分も他と共に榮える之を短く云へば所謂自他共榮である。共榮とは榮える事である、榮えると云へば肉體的にも精神的にも發達する事で凡ての事に人間が發展する事が意である。肉體的に榮えるには自己の精神的の力を總て事に就て最も有效に傾注し活用しなければならない。肉體と精神を……

最善に活用

して健康にもなれば又、智慧を增すのでもある、人間が精力を肉體的にも精神的にも活用させて始て効力ある活用なのである、人を使ふのが上手だと云ふのは最も効力ある活用となしてゐるからである。苟も已の目的を達する事は自已の力と精神とを最も有效に働かせねばならない。此演說は前年當地へ來た時話した事だか知れない前年お聞きの方はお知りであるかも知れない。之が所謂精力最善活用であります。そして凡ゆるものが此原理に基いてゐる、業務の成功にせよ學業の優にせよ凡てが基いてゐないものはない、此も例だが小兒が今帽子を頻にいぢつてゐる●之は善用でない即ち人が話をなしてゐる時、熱心に聞く事を忘れてゐる此んな子兒は學校でも全じだ先生が講義してるのもよそにして帽子をいぢつたり前の子兒と惡戲をしたりしてゐる。之が惡い許りでなく遂々習慣を作つてしまふ、今親が病氣の時醫者が此々の事を注意せよと話して居つても上の空で聞流してしまふ。さて病氣の種々なる徴候があつても大事な手當法も一つも頭にない、それで泡を喰ひジタバタしても全く失敗に歸してしまふのである。

されば精神を鍛練し人が物を云ふ時は一語も落さずよく理解する樣に務め、事々物々に就て少しでも精力最善活用をして理解し、自分の益にしなければならない、どんな時でも處でも最善活用は出來るのである。例へば家に居る時は水を汲んで家事を手傳ふとか掃除をするとか凡て何か役に立つ事を日常の習慣としなければいけないそれに學校では怠け、家に居ては何もしないでブラ〳〵遊び放題ならばやがて世間の人から此横着物奴馬鹿者奴と無役者と非難されるやうになる。學校に行く時もサッサト早く行き歸る時も速にしかうなれば時間の餘裕も大となり、豫習復習を充分出來る。極く一瞬一瞬に最善活用を計らねばならない小兒許りでなく老人でも同じだもう金持になつたからと云ふてそれを浪費する要はない、自分は隱居だからと云ふて世事を離れて、自分許りを考へる必要もない、そう云ふわけだから精力の善用は凡ゆる事に全活用し得た金は何にでも用ひるかうなれば國家が榮え、富も高まり國力が增進するかうして國際間にも重大な位置を占め得られ、やれ世界三大强國だのと云はれてゐても內藏力の淺薄さを露出して悲慘な幻滅の悲を哀なめる事なしに安心して一刻も早く不安を去つて世界の眞の大國になれます。即ち一人一人の精力最善活用は延いて、一國の消長に重大使命を齊し一國の運命を左右するものであります。

之が私達……

柔道の根本精神

であり、國家としても自分一個としてもそこに大根據を占めなければなるまい。道場の汗を流してコロバシたり投げたりするのも此瞬刻此時間に於ての我精力最善活用であり、之を社會全般の事に及し技術を練磨すると共に、自已の社會的勇飛を企し得るものであります。かくして社會万般の最善活用は延いて國家に貢獻する事が出來ると思ふのであります。——〔完〕——

（文責在記者）

活耳目
酒杯獻酬可否論

■過般來平せられた嘉納治五郎氏は歡迎會席上相互に盃の獻酬は精力の最善活用の見地から無益いものであるから排したいものであるとか逃られたとか『筆者は此折受附をなして居つた爲知らなかつた』其直後氏に敬意を表すべく盃を進呈した處が氏よりしかられた。しかるのは無理ならぬ事だ。然し知ぬが佛でやむを得ぬ事であらうと思ふと答へた■それから氏は酒飲の說明をされた、氏曰く酒飲は
一、衞生を害せざる範圍に
二、時間の許す範圍に於て
三、經濟の許す範圍に於て
此の見地から私は多少酒はやります、煙草はやりませんと、此處に筆者眞立は御答へした。

『かくまで適當の量でとならば要するに程度問題であらふ、然らば氏の獻酬を避けたいとは期する所自己のためである、氏は氏の体力から二本以上はやれぬ由であらば相互獻酬を排すとは多くの盃をうけとれぬ自家豫防の勝手な防衞策からの挨拶であらねばならぬ氏として何が故に私は二本以上やれぬから獻酬を排したいと正直に挨拶否な希望を逃べられなかつたであらふか、精力最善活用とか、衞生上から獻酬を排したいとはアマリに手前勝手な事であらふと思ふ』と氏はアハーだと、

■次に獻酬絕排は餘程修養のつんだ偉い人でなければ出來得ぬ事でせうと御聞きした、それがいかぬ、自ら平凡等とは……、氏より平凡なる人多ければこそ氏が偉人として尊敬されて居るのだ、吾人は平凡な人多きをこの立憲治下では希望して居る、氏の如き英雄豪傑の人許りであつたら世の中はどうするか、これより氏と筆者の問答正に高潮にならんとする節町議阿部唯次郎氏が來りしによつて筆者は失禮した。

（つゞく）

綠陰の清風波上の明月を戀しがるシーズンとなつて現はれ出でましたる新妓は……

■仲家から小清と名乘る座り美人、一寸元眞佐の家に居つた小政に似て居る、淺草では佐代龍と稱したるかなか〳〵コンガラッたローマンスがある事は知る人ぞ知る、小清裙、先の小清におとらず展した〳〵——小清は仲家の止め名とかである。東京の二の舞やらぬ樣……ハイ——四六四九

■前號に報じた故愛子の四人組中、竹美とあつたは福平の誤り、あの世から取消し申し込みあつた故訂正しておきます。

■甲子ミツ子年に似合はず固物で去る夜常盤で挑まれたので跣で逃出したが玉札丈は持つてきたは中々素早い凄腕だと——

■世に一寸似て居る人三人あるとか[illegible]

■橋家花香裙　理智の閃きある明眸　織細な撥捌きはホソで苦勞したのを物語つてゐる[illegible]迄も冷靜だが、人の爲に泣き得るとは閨中秘聞御存知の方は手をあげ

■竹廼家磯壽拍子、澄んだ張りの[illegible]實は磯濱は大平洋の怒濤で馴らしたノドで[illegible]

■久本の清奴はどこでもハーハー云ふが感の惡い客には通せず、ハーは何の事自分獨り嬉しい。はー玉は誰が拂ふんだいとさい。

故愛子
大山よれ

■三島家愛子　口を歪めて喋る、彼女の聲はもうきかれない、近頃はほんとうによく飲み……よく喋つた……三味線は普通だが、花を活け茶の湯も相當にやり撞球も出來てお座敷はよくつとめた、殊に太皷が得意で「ネーこう云ふの御存知!とトコトン〳〵よく打つたものである。百々之助の寫眞の時はきつと金線の眼鏡かけ特等席に納つて居たのは皆樣の御記憶に新らしいものがありませうそれ程、百々ちやんが好きで集めたブロマイドは三四百枚はあつた、米國に居る彼女の愛人を胸に秘めつた彼女の魂は今何處?……但し〇月のカタイ金物の手に依つて彼女はニッコリして冥した事であらふ……。

同窓會報（五）

□鈴木正武氏「第一回」卒業　外國語學校獨逸語科卒業後獨逸人の通譯として京都山科紡績會社に勤務中獨逸人の歸國後同社外人の代理として在職精勵して居る氏は小名濱町長の息である、

□酒井菊雄氏「第十二回」醫學博士の氏は東京衞生試驗所の技師長となつて去る三月より就任大いに市衞生のために努力して居る。

□野崎喜八郎氏「第拾二回」南洋歸りの氏は東京府下大泉村大泉樂園都市內

□古市榮三郎氏「第一回」氏は終始一貫二十餘年一日の如く東京瓦斯會社に勤務中であつたが、今回同社を辭して燃料に關する器具機械の製作業に從事する由城山植竹氏其他に便りがあつた。

圖磐中活躍號資料急募

◎知人消息

△長野幹氏　元朝鮮總督府學務局長にして今回知事休職となつた氏は東京市外上大崎長者丸二五三に落ちついたと、因みに氏は植竹源太郎氏コト子夫人の實弟に當つて居る。

◎御斷り

左の記事は次號に報ず
一、記者長谷川執筆の「印象」
一、玉川村農會役員選擧の件
一、西村屋藥舖强盜彼害に對する平警察署の處置批判の件——其他